

6月30日 第2回まちづくり評価委員会 会議概要

- 日 時：平成 20 年 6 月 30 日（月）10:00～12:00
- 場 所：消防局庁舎 3 階第 2 会議室
- 出席者：（出席委員）
菊池委員、駒井委員長、榊原委員、四宮委員、鈴木委員、田中委員、
長井委員、西原委員、三村委員、室谷委員（50 音順）
（事務局）
廣川企画調整部長、福本政策担当課長、黒澤主査、竹田、田部井
- 欠席者：金井副委員長、森川委員
- 傍聴者：1 名
- 資 料：別紙のとおり

概 要

（開 会）

福本政策担当課長の司会のもと、会議資料の確認および欠席委員の連絡を行った。

（福本政策担当課長）

- ・ 第 1 回まちづくり評価委員会で課題となりました会議の流れについて、事務局が委員の皆さまが検討しやすい方法と思い検討事項をまとめました。委員の皆さまへのご送付が遅れてしまい申し訳なく思っております。本日は、この検討事項を切り口として活発なご議論をお願いしたいと思います。

1 検討事項について

将来像 1 にぎわいを生む社会
多くの人が訪れるまち横須賀

検討事項 1

「現在について」「以前との比較について」とも評価されており、現在の施策が支持されていると考えてよいでしょうか。

代読（金井副委員長）

- ・ よいのではないかと。むしろ、実感を反映できるような指標を研究してはどうか。

（室谷委員）

- ・ 有効回答率は 42.3%であるが、50%に達していない。全体をみると低い印象がある。有効回答率の中で何%がよい評価であるのか。

(事務局：福本政策担当課長)

- ・ アンケート分析においては絶対数で比較することは難しく、支持・不支持の比較で判断している。市の政策を支持している人が多ければ、とりあえずの合格点はもらったと考えている。

(室谷委員)

- ・ アンケート結果では「どちらともいえない」の割合が多いが、この捉え方はどうか。

(福本政策担当課長)

- ・ 今回の評価では市民の実感を大切にしているが、「どちらともいえない」は、良いと実感していない意見と考えることもできる。この点は、注意すべき点であると認識している。

(鈴木委員)

- ・ 施策は概ね良いと思う。

(四宮委員)

- ・ 主要鉄道駅乗客数について、定期と定期外（通常の乗車券）の利用数を見ると、定期はここ 10 年で減少しているが、定期外はほぼ横ばいという調査結果がある。定期外の利用数が横ばいである状態は、来訪者は減少していないと見ることもできるので、アンケート結果に見る「思う」「どちらともいえない」の割合は、市民の実感と近い現状があると思う。

(駒井委員長)

- ・ 指標の数を限定せず、入れ替えや追加など見直していくことはできるか。

(竹田)

- ・ 見直すことはできる。

(駒井委員長)

- ・ 第 1 回委員会では、リピーターの必要性や多くの人が訪れていることを感じられる要因は施設の充実である等の意見があったが、主要鉄道駅乗客数で市民の実感を測れるか。

(四宮委員)

- ・ マーケティング調査では、三浦半島は房総半島などの他の観光地と比べ、リピーター率が低く出ている。また、横須賀に行こうと思う人の動機付けにおいて、施設に対する評価も低い。

(菊池委員)

- ・ アンケートの回答は、感覚によるものであると思う。「よくなっている + どちらかという + よくなっている」と回答している人の割合は、年齢別でもそれぞれ 40 ~ 50 % と高い評価を得ている。これは 100 周年事業や開国祭といった市全体のモチベーションを上げるようなイベントが感覚に寄与しているからではないだろうか。
- ・ 本質として、「どちらともいえない」が市民の実感であるかもしれないが、評価として

は、概ね市民の実感が良い方向に向いていると思う。

(四宮委員)

- ・ 鉄道は横ばいであるが、近年のマイカー普及率を考慮すれば、「どちらともいえない」という意見は思う側に沿った意見であると思うので、実質プラスといえるのではないか。

検討事項 2

顧客吸引力指数が低下していますが、どのような政策が不足していると思いますか。
--

代読 (金井副委員長)

- ・ 顧客吸引力指数を高めるための事業は、将来像の実現のために本当に必要なのか。顧客吸引力指数が低下しても、多くの人が訪れていると実感されていれば、将来像としては実現の方向に向かっているのではないか。むしろ、実感を反映する別の指標を探すべきではないか。また、顧客吸引力指数は単に商店街の政治力を反映しただけの指標設定ではないか。

(四宮委員)

- ・ 横須賀市民は、買い物の交通手段として、鉄道より自動車を利用する人が多い。また、休日に家電商品等の大きな買い物をする時は、横浜や東京まで出かけていると思われる。
- ・ 顧客吸引力指数は、小売業年間販売総額から算出した数値なので、買い物の頻度は地元商店街を利用することが多くても、休日の市外での買い物の金額が大きいので指数が低く出ているのではないか。
- ・ にぎわいを示す指標として、金額ベースがいいのかという疑問はある。

(室谷委員)

- ・ 自動車で買い物に出かける人は上大岡まで行ってしまう。横須賀中央駅周辺は駐車場がなく、あっても入りづらい。多くの人が訪れるまちには、駐車場の整備が必要ではないか。
- ・ 京急駅の利便性は高いので、今後は施設までのアクセスを整備すればリピーターは増えると思う。横須賀美術館が建設された時、景観が良い等の理由から行きたいと思う人が多いいたが、駅から美術館までの道のりを調べなくてはならないという意見があった。アクセスについて施策に繋げなければならないと思う。

(田中委員)

- ・ 東京や横浜に行く場合、自動車よりも電車を利用するほうが便利である。そのため、横須賀中央駅周辺に駐車場を整備することがにぎわいに繋がるか疑問を感じる。人が買い物に行く動機は、本質的にはそこに欲しいものや魅力あるものが売っていることであるので、行政が駐車場の整備に重点を置いた施策を行ったとしても大きな効果はないと思う。

(榊原委員)

- ・ イメージ的に、おしゃれな物を購入できるのは東京、横浜と思っている人が多いのではないか。神社やお寺などではトイレが不足している。

(駒井委員長)

- ・ 顧客吸引力指数は、吸引力だけでなく購買力も反映したものである。2年間で0.93から0.88へ0.05ポイントも下がってしまった問題は、大きな変化として検討しなければならない。数値自体が低いことは、東京と比べれば他市でも1.00を下回るので妥当と捉えてもよいのでは。

(室谷委員)

- ・ 若者の購買力は影響が大きい。若者向きの店は横須賀中央に少しあるが、商店はどの層を狙うのか明らかにしなければ、購買力につながらないのではないかと思う。

(西原委員)

- ・ 半島という地形的な特性から、横浜から横須賀へ買い物に来る人は少ない。中心街が中央、久里浜、衣笠と分散している状況も要因としてあるが、市外で買い物することは仕方ないことだと思う。いかに市民を引き留めるかを考えなければならない。

(田中委員)

- ・ 指標はやめたほうがいいと思う。「多くの人が訪れるまち」について考えた時、観光と商業しか考えていないのではないか。基本計画では、学びで来る人も交流人口として考えているはずである。
- ・ また、アンケートの回答について、興味のない人はそもそも回答してこないはずである。「どちらともいえない」「わからない」と回答した人は、判断できるだけの情報が足りないために答えられない人であると思う。今後は、市の取り組みや指標について、よくアピールしたうえでアンケートを行わなければならない。

多くの人が働くことができるまち横須賀

検討事項 3

「多くの人が働くことができるまち」のアンケート結果では、若年層よりも、50歳以上の満足度が低く、優先順位にもそれが現れています。これは、定年後の就業についての不安なのでしょうか。また高齢者の就業を支援することで満足度は上がると思いますか。高齢者の就業支援を考えると、高齢者が求めるのは経済的なものだと思いますか、生きがいだと思いますか。

(田中委員)

- ・ 高齢者や子育てが終了した女性に、就労の場があることをアピールすれば、満足度は上がると思う。
- ・ 高齢者が求めるものは、生きがいと経済的なものの両方であると思う。給料が下がっても、働く時間・場所といった自由度が重視される傾向はある。また、女性の就労については、月5万円程度の自由なお金があれば満足との調査結果があるので、生活のためというより小遣い感覚で働く人が多い。

代読 (金井副委員長)

- ・ 若年層よりも50歳以上の満足度が低く、優先順位にもそれが現れている点は重要で、中年・高齢者雇用対策が必要である。また、それを把握できる指標も必要ではないか。

ただ、相対的に中高年齢層の満足度が低いということだが、他の施策と比較し、全体的に満足度が低いので政策的に重点化すべきというメッセージなのではないか。

- ・ 高齢者の就業支援や退職後の就業については、市で調査研究を重ねるべきであり、その旨を委員会で表明すればよい。

(室谷委員)

- ・ 女性・高齢者一体として、生きがいと経済的なものが必要であると思う。フルタイムで働かなくてもよいという意見は全体の認識である。ただ、働く場の確保は難しい。シニア創業資金融資や女性創業資金融資といった事業の実績を追跡する必要がある。
- ・ 新たな事業を考えた場合、少しでも手当てが出るボランティア等はこれからの高齢社会で必要とされてくると思う。女性はボランティアに多く参加しているが、団塊の世代の男性は地域に溶け込まない者もいる。男性は運転免許所持者が多いので移送サービスなどの職種を考えてはどうか。
- ・ 新たな事業を検討し、雇用の場を生むきっかけを作らなければならないと思う。

(菊池委員)

- ・ 働く場は常に変化しているので起業という形でなにかできないか。商工会議所では、団塊の世代の方々の支援として「SOHO 支援事業」を行っている。今まで培っていた技術を、中小企業が困っている分野の手助けに活用していただく事業である。たとえば、総務部門に長年勤務していた人や就労規則などに長けている人には、法令改正時に、規則の整備をしてもらっている。中間的な受け皿としての仕組みを構成することで、退職者の働く場は作れるのではないか。
- ・ 会社に勤めていた人達は、社会に貢献したいと思ってもどのようにすればいいのかわからないので仕組みを作ることが必要。
- ・ また、商店街では店主がイベントを企画し運営しているので、イベントお助け隊のような手助けができれば、店主はイベント時でも商売を続けることができる。
- ・ 市と商工会議所で様々な部分の隙間を埋めるような仕組みをつくり、中小企業支援を施策につなげられれば、退職者の能力が有効に活用されていくと思う。

検討事項 4

マイナス面の理由を見ると「大企業の市外流出・閉鎖」「大企業がない、減っている」などの意見が多くなっていますが、大企業の流出について市民は自分のこととして本当に困っているのでしょうか、イメージによるものが大きいのでしょうか。

(三村委員)

- ・ 実際困っている人はいたと思う。会社が市外に移転すると、従業員の中には単身赴任を余儀なくされた人や転職を考える人もいたと思うので、色々な面で影響があったと思う。

(事務局：廣川企画調整部長)

- ・ 実態として、かなりの人が単身赴任しているようである。中には、会社のバスで通勤している人もいる。子供が小学校に通っているなどの事情から、動きがとれないという実態がある。

(菊池委員)

- ・ 横須賀に進出してくる企業はあるので、雇用の場は生まれていると思うが、大企業の流出によるイメージ的なものが評価を左右していると思う。

(鈴木委員)

- ・ 三浦半島は自然が豊かで、また温暖であるので住みやすい。住むなら横須賀だが働く場がなければ単身赴任でもしかたないと思っている人はいると思う。

(田中委員)

- ・ イメージによるものが大きいと思う。委員会で提言を出すと、行政側は何かしなければならぬと考えられると思うが、大企業を誘致することに関していえば、少し考えなければならぬ。横須賀のポジションは変わってきている。以前のように、大企業が進出してきて雇用の場が確保できるというイメージを持ち続けることは危険である。むしろ、中高年のボランティア活動のような細かい分野で雇用の機会を見出していく方向のほうがよいと思う。

(鈴木委員)

- ・ 全国 1 位になるくらい下水道の整備を行えば、住みよいまちになり、横須賀が住みよいまちになれば、企業はなくても人は集まるのではないか。

(駒井委員長)

- ・ 企業はなくても住みよいという方向性はある。

にぎわいを生む社会

検討事項 5

横須賀市に「にぎわいはあるか」と聞かれたら何をイメージして回答しますか。

(長井委員)

- ・ 横須賀ににぎわいを求めるならば、「横須賀のランドマーク」となるような商業施設が必要であると思う。新聞報道によると、西友が入っている商業ビル跡地に、高さ 150 メートルの商業・住宅用ビルを建設する再開発計画が都市計画審議会で承認されたとのことである。こういったことが横須賀のにぎわいに貢献することを期待したい。
- ・ 行政が言う「にぎわい」とは、観光施設を指しているのではないかという印象を受ける。しかし、にぎわいはあるかと聞かれると、商業施設のことをイメージしてしまう。市内の商店街を見ると、にぎわいは感じられない。
- ・ ガソリンの高騰や eco への関心から、車社会を発展させていくよりも、鉄道の利用を促進させ、商業施設や観光施設を結ぶ新都市交通のようなものを作ることが必要だと思う。

(榊原委員)

- ・ 東京、横浜とは違う「これぞ横須賀」という魅力を創造し、市外からの来訪者を増やさなければ、市外に人が流れてしまう。

将来像 2 新しい芽が伸びゆく社会

子育て世代に選ばれるまち横須賀

検討事項 6

子育て世代に選ばれるために、どのような施策が有効でしょうか。子育て世代はどのような支援を求めているのでしょうか。現在の施策の内容は効果的でしょうか。

検討事項 7

「子育て世代に選ばれるまち」の「現在について」を見ると、全体としては平均スコアがプラスになっていますが、年齢別の 30 歳代、世帯状況別の小学生未満の子どもがいる、小学生～中学生の子どもがいる世帯では平均スコアがマイナスとなっています。この施策において、子育て世代の要求は高く、満足度を上げることは難しいのでしょうか。それとも何かこの数字を上げるための施策があるのでしょうか。

（鈴木委員）

- ・ はぐくみかん建設はよかったと思う。有効的に活用すればよい支援となる。

（室谷委員）

- ・ はぐくみかんは子育ての最先端だと思う。しかし、1つあればいいというものではない。子育て相談の中心ははぐくみかで、地域においても相談できる体制があればよい。また、人材の育成についても考えていく必要がある。

（四宮委員）

- ・ 保育園待機児童数は少なくなっているが、数字のマジックの可能性もある。東京、横浜に勤めている親が子供を預けるためには、午後 8 時までの保育はマストであり、午後 9 時 10 時までの延長保育が必要になる。しかし、遅い時間まで延長保育を行っている保育園は少ない。6 時に終わる保育園にはそもそも申し込まないので、待機児童数は少なくなる。働く女性のニーズに合っているか検討していかなければならない。

（室谷委員）

- ・ 児童福祉法などの法律との絡み合いで対応が難しい部分があるかもしれないが、横須賀方式で柔軟な施策の運営が必要である。
- ・ 子育て全体をみると保育園だけではなく幼稚園もある。幼稚園には補助金等を出していると思うが、施策の中には出てこない。幼稚園は私立にお任せということではなく、子育てを全体的に見る目が必要であると思う。

（田中委員）

- ・ 幼稚園の入園支援金は自治体により差がある。お勧めするという意味ではないが、子育て世代には、入園補助金を出している自治体の評判がよい。厚木市では、おむつを無料配布している。
- ・ 今後検討しなければならない問題として、一時保育がある。子育てに疲れた親がリフレッシュできる短時間の一時保育を検討していくことが、子育て支援にとって必要ではないか。
- ・ 地域で全般的に相談できる仕組み作りについてはよいと思うが、虐待やネグレクトに

については相談では表面化しない。はぐくみかんを中心とした地域のネットワークを形成すれば、保育士などの情報を収集することができ、手遅れになる前に問題を処理できると思う。

(鈴木委員)

- ・ 横須賀市は虐待児童の連絡件数が全国 1 位である。これは、虐待に対し市民がシビアなので、連絡をすぐにするからではないかと考えている。
- ・ 現在、民生委員は児童委員も兼ねており、中には主任児童委員として児童専門に活動している人もいる。この人達は、虐待問題で相当活動している。はぐくみかんと連絡をとりながら虐待の原因をつきとめていかなければならない。

(榊原委員)

- ・ 子供が病気になると親は会社を休まなければならないが、預けられるシステムはできているか。

(鈴木委員)

- ・ うわまち病院にできてはいるが、数はまだ少ない。

(菊池委員)

- ・ 事例として、工場の中に保育所を作っている会社もある。そこで働く保育士は正社員として採用され大切にされている。また、園児は会社まで連れて行くことができ、幼稚園バスに会社の前を回ってもらうなどの取り組みがされている。
- ・ 子育てに関する問題は多岐に渡っているので、行政だけで対応することは難しい。独自の取り組みを行っている企業を評価し支援するような施策がないと、水平展開がないまま埋もれてしまう。

(鈴木委員)

- ・ 京急には駅前保育を是非検討してもらいたい。

(田中委員)

- ・ 就学前の子供を育てている世帯が居住場所を選ぶ際、保育園、幼稚園のことを検討材料とするであろうか。むしろ、住宅の条件などで判断するのではないだろうか。子育て世帯が転居する要因には、子供が学齢期に上がる頃に共働きの世帯では持ち家への関心が高まることや、子供が学校に通い始めると 9 年間は移動させたくないと思うので 10 年くらい定住できる場所を探すことがあると思う。
- ・ 谷戸に住む高齢者を駅前に住まわせ、空いた家を子育て世帯に家賃補助など行いながら支援していく施策が効果的であると思う。

(四宮委員)

- ・ 会社の社員の中に、子供が生まれて横須賀に転入した人はいない。保育園、幼稚園がないなどを理由として横須賀から転出する話は聞く。この点において、居住場所の選択基準における子育ての割合は、女性は大きいと思う。施策は大きな判断材料になっていると思う。

(室谷委員)

- ・ 品川区は横断的な事業を行っているので、施策がよいというイメージで人が集まっている。子育てしやすいイメージを作るためには、1つ1つの施策も大事だが、まち全体で子育てに取り組んでいると感じられる地域づくりが必要だと思う。
- ・ 親子で情報交換ができるような公園や場所があれば、イメージとして、まち全体で子育てに取り組んでいるように見える。そのような公園は市内地域ごとにあるか。

(榊原委員)

- ・ 設備のいい公園はあるが、人がいないため、怖いと思う時があり子供を安心して遊ばせられない。子供が安心して遊べるような地域環境を取り戻せたらよいと思う。また、人間関係のつながりにも公園の役割は大きいと思う。

(事務局：福本政策担当課長)

- ・ みんなの家、行政センター、健康福祉センターなどで子育てサークルを作り、子育ての相談を受け、また母親同士の交流を図るなどの政策は行っている。地域の相談の拠点は、そういう所で保健師を間に入れて行っている。
- ・ 虐待防止については、全国でも先進的な取り組みを行っているので、発見率が高い。特徴的な施策をきちんとPRしていかなければならないと考えている。イメージは重要であり、目標指標以外の取り組みについても、市民にアピールしていかなければならない。
- ・ 東京、横浜に通う人のための子育て政策を考えなければ、他市に対抗できないと考えている。

学びを大切にすまち横須賀

検討事項 8

「学びを大切にすまち」は、横須賀の未来を考えれば、新世紀ビジョンの中でも重点的に資源配分しなければならない分野であると考えています。

しかし、今回のアンケート結果では、市民の満足度は高く、優先順位は低くなっています。

このことについて、市民の思いをどのように考えますか。また、現在の施策の内容は効果的であると思いますか。

代読 (金井副委員長)

- ・ 学校教育をきちんとすれば十分ではないか。

(菊池委員)

- ・ 横須賀の未来を考えた時に、横須賀で学んだ人が横須賀で活躍するかを考えなければならぬ。横須賀市が学びを大切にしている、東京、横浜で就職してしまうと、新世紀ビジョンとしてこれでよいのかと思う。学んだことを地域で生かすという気持ちに市民がなることが、新しい芽が伸びゆく社会であると思う。

(三村委員)

- ・ 横浜、川崎を除く市町村の教員は、県が採用し赴任先が決定される。採用される教員には地方出身者が多い。神奈川県で大学で学び、神奈川県で免許を取り、神奈川県で就

職する人は少ない。

- ・ アンケートの回答理由をみると、悪いと思う理由に「学力低下」や「先生の質がよくない」などが挙げられている。その要因として、勉強は塾に任せようという人の割合が多いことがあるかもしれない。

（室谷委員）

- ・ 県立保健福祉大学の受験者は 70%が神奈川県出身者である。県立大学でも横須賀で働いて欲しいと思っているが、横須賀で働くためには働きやすい場所がなければならない。
- ・ 横須賀は学校が選べる環境であるので、学びに対する満足度は高い。しかし、施策を見ると不登校に対する施策が不十分であると感じる。学校に戻らない児童の受け皿として、フリースクールのような教室が必要ではないか。

（鈴木委員）

- ・ 中学校でフリークラスを実施している。

（三村委員）

- ・ 不登校児を学校に戻すための支援として、スペースゆうゆう（適応指導教室）が開設されている。
- ・ 最近では小・中学校連携のため、今まで以上に情報交換を行っている。小学校では、フリークラスのような教室はないので、各学校での対応となっている。
- ・ 中学校にはスクールカウンセラー、小学校にはふれあい相談員が配置されているが、予算面の問題から週 1 日程度の相談になっているので、日数を増やして欲しいと思っている。
- ・ 小学校に通う子供を持つ親は、子育ての悩みも抱えている。教育と子育ての相談を充実させていくことが子育て支援に繋がっていくのでは。

（鈴木委員）

- ・ 不登校の原因は、虐待やネグレクトではないかと思う。

（室谷委員）

- ・ 不登校問題は、施策の中でも重要な分野である。

（事務局：竹田）

- ・ 資料 3 P. 15 目標指標「不登校児童・生徒の学校復帰改善率」において、平成 19 年度の数値は、児童 48.8%、生徒 69.5%となっており、現状は、改善よりも復帰が伸びている。

（四宮委員）

- ・ 教育や防災の分野では、高い満足度＝低い優先順位ということではない。鉄道の安全対策と同じように、満足度が高いという理由から予算配分を抑えると、その分野は手薄になり、取り戻すのに多くの時間を要してしまう。

（長井委員）

- ・ 資料 2 P. 62 「思う＋やや思う」の理由は、市民が客観的にイメージした意見だと

思う。一方、「あまり思わない+思わない」の理由は、自分の体験からの批判が含まれていると思う。

- ・ 市民の満足度は高くないと思っている。なぜならば、アンケートの回答理由をみると、学校教育関係の悪い理由が件数、割合ともにならかなり多くなっているからである。「全体としての市民の満足度」が高いのは、市民大学等生涯学習の充実や県立保健福祉大学の開学などが評価、全体の満足度を引き上げたのではないかと思う。

(駒井委員長)

- ・ 優先順位は低くなっているが、捉えられていない問題があるかもしれない。未来を考えれば地域を生かさなければならないし、また、広報などに対する個別の問題もあるかもしれない。

新しい芽が伸びゆく社会

検討事項 9

「新しい芽が伸びゆく社会」には出産の支援、就学までの支援、学校教育などが含まれていますが、市はどこに重点的に取り組んでいくべきだと思いますか。

(榊原委員)

- ・ 安心して出産できる場が必要だと思う。

(鈴木委員)

- ・ 横須賀市は助産師の育成に力を入れている。

(室谷委員)

- ・ 産科、小児科が少ない。他市に搬送されたという話も聞く。医師の確保は重要な問題なので、従来どおり続けて欲しい。
- ・ 主要事業の「産科医療対策支援事業」は、平成 20 年度以降継続されないのか。

(事務局：竹田)

- ・ 産科医療対策支援事業は、施設導入の経費を助成する事業であるので、平成 19 年度までとなっている。うわまち病院でも同様の施設を検討しているようである。

(事務局：福本政策担当課長)

- ・ 病院に対する NICU (新生児特定集中治療室) のような施設整備のための支援であるので、他の病院でも導入を検討するようであれば、その段階で予算措置されていく。

(室谷委員)

- ・ ぜひ継続して欲しい。社会問題にもなっているので、表現などに気を付けマイナスイメージを失くさなければならない。

(西原委員)

- ・ 横須賀は絶対的に産科の医師が足りないもので、市外で出産する人が多くいる。横浜、川崎と連携し、病院を紹介するなどの対策が現実的だと思う。

(駒井委員長)

- ・ 出産の支援は重要な項目として、今後検討していかなければならない。

将来像 3 長寿を楽しめる社会
高齢者が活躍するまち横須賀

検討事項 10

「高齢者が活躍するまち」では男女の満足度に差があります。男性に対してどのような支援をすれば良いと思いますか。

(鈴木委員)

- ・ 全国の社会福祉協議会では「いきいきサロン」を運営している。いきいきサロンは、定年を迎えた男性が孤立しないよう地域活動に参加してもらう取り組みである。しかし、男性だけではなく女性が参加することもあるので、市内 3 箇所のサロンは男性のみとしている。男性の世界で趣味が合わせられ、そのことで参加を促すような取り組みを行っている。

(西原委員)

- ・ 福祉関係に参加する人は、大半が女性である。いきいきサロンでお世話する人やクリーンよこすかなどの環境関係に参加する人も女性が多い。その一方、自治会、町内会には男性が多く参加している。このような関係を解消するため、参加の呼びかけを行っている。福祉と環境関係は男性に、そのほかは女性に参加してもらう必要がある。
- ・ 人には得手不得手があるが、これまで培ってきた経験は地域活動に参加することで生かされていくと思う。

(榊原委員)

- ・ ボランティアに参加する男性の背後には肩書が見え隠れする人がいる。ボランティアに参加し周囲と協調していける人が残り、それ以外の人は孤立してしまう。

障害を感じさせないまち横須賀

検討事項 11

「障害を感じさせないまち」では駅舎エレベーター等設置に対する評価が高くなっていますが、あと数年で設置が必要な駅への設置が終了します。「障害を感じさせないまち」は満足度が高く、優先順位が低い項目になっており、ニーズがないとも言えそうですが、エレベーター等の設置終了後に有効な施策はあるのでしょうか。

(榊原委員)

- ・ 歩道の段差をなくし、車椅子でどこでも行けるまちを目指してはどうか。

(西原委員)

- ・ だんだん良くなっている。

(室谷委員)

- ・ 生活のうえで困らないかどうかは障害を持っている人にしか分からない。車椅子の人だけではなく、視覚障害の人や他の障害を持っている人にも配慮したなまちづくりが必要ではないか。心のバリアフリーも含めて、バリアフリーのまちづくりを大事にして欲しい。
- ・ 施策は今後も継続して欲しいが、障害を持った人の意見を聴取し、セグメント別に意見を分析して施策に取り組んで欲しい。

代読 (金井副委員長)

- ・ 障害を持った人に対象を絞った調査が必要ではないか。

(四宮委員)

- ・ 追浜駅から湘南病院までの坂は車椅子の人には辛いので、駅員が送り届けるサービスを行っている。しかし、帰りをどうするかという問題がある。バリアフリー対策は、大きな視点が必要であり、また実際に使っている人からの視点がないと、十分なサービスが提供できない恐れもある。
- ・ 駅舎エレベーター設置のような小さい施策だけではなく、大きな視点をもった施策があると会社も取り組み易い。会社としてもソフト面で検討していく。

(室谷委員)

- ・ 障害のある人にとって、人の手助けではなく、自ら行動でき、自分で生活できることが重要である。

(鈴木委員)

- ・ 福祉タクシーもあるので、それらを有効活用してもらいたいと思う。

(駒井委員)

- ・ 駅舎エレベーターの設置が終了しても安心してはならない。アンケートは全市民が対象となっているので、今後は障害を持っている人の意見を聴取し研究していく必要がある。

○ 第3回まちづくり評価委員会の進行について

(事務局：竹田)

- ・ 将来像1から将来像3までは、事務局で委員会意見の素案を作成し提示する。
- ・ 将来像4については、第3回委員会で議論していただき、その後に素案を作成する。
内容の修正などは電子メールやFAXでやり取りを行い、最終的に委員長と事務局でまとめたい。

(閉会)

(事務局：福本政策担当課長)

- ・ 第3回まちづくり評価委員会開催日時・場所の確認
- ・ 第1回まちづくり評価委員会会議概要の確認依頼
- ・ 委員確認事項書類の記入依頼

(駒井委員長)

- ・ 第3回委員会では『元気な横須賀』について検討しなければならないので、検討方法等の説明を簡単をお願いします。

(事務局：竹田)

- ・ 第1回、第2回と将来像ごとに検討した。全ての分野に力を入れて取り組みたいと思っても、やはり、重点となる分野、緊急性を要する分野を絞り込んでおく必要がある。
第3回委員会では、そういった視点でご意見をいただきたい。

他に議題がないことを確認し、閉会とした。

以上